

アケイロポイエートのキリスト像

持田 行雄

The "Acheiropoiêtos" Christ-Image

YUKIO MOCHIDA

問題の所在

近代プロテスタントの自由主義神学は、聖書を古代の一個の歴史学的文献とみなして他の同時代の諸文献と同等に取り扱い、聖書から「神言性」を剥奪して、これに「人言性」を与えた。しかし、こうして聖書の正典性を否定して正典的規範倫理の成立根拠を無化しておきながら、なお、イエスを最高の道徳的規範とする方向を棄てることはなかった。従って、自由主義神学はそれ以来、なぜソクラテスや旧約の預言者よりもイエスの方が偉大であるのかという問題、すなわち、異文化の宗教や思想に対してキリスト教の絶対性・独自性を主張するという解決の不能な問題に苦しみ続けなければならなかった。それは、ひとえに、本来統一的な信仰告白であったはずの「イエス・キリスト」を「歴史のイエス」(史的イエス)と「信仰のキリスト」とに分離して、もっぱら人間イエスを歴史主義的に追求してきたことによる。

この歴史的批評的研究から出発した様式史的研究も、「キリスト」と「イエス」を分離する。そして、終末時に先立って我々の実存に自己理解を呼びかけるケリュグマのキリストを史的イエスから峻別し、キリストとの実存的な対話を個人の決断の問題とみなすのである。確かに、客観的規範に従う倫理的行為の方向決定には個人の選択的な決断が必要であろう。しかし、キリスト教信仰が問題にするのは、倫理的行為ではなく、信仰による随従である(マタ8:22)。無論、この随従はキリスト・イエスの選出による。個人の選定ではない(マタ4:19)。召命が倫理的行為の出来事ではなく宗教的信仰の出来事であるのはこの理由による。キリスト教信仰の中心をケリュグマのキリストからの呼びかけに対する個人の決断にみる様式史研究の実存論的神学は、この点の理解を欠いていたと言ってよいだろう。様式史研究によると、歴史学的資料の不足のために、史的イエスの生涯を再構成するのは不可能に近いという。そこから、彼らの思い描くイエス像は、もはやキリストではなく人生の教師ですらもない。乏しい資料から僅かに帰納されるイエス像、すなわち、弟子達からキリストとみなされたイエス、「宣教される者」とみなされた「宣教する者」であるに過ぎない。ついにイエスは「正真正銘の人間」・「ただの人」になった。

無論、このような結論が多くの神学者達を満足させることはできなかった。従って、その後も「史的イエス」の新探求は続けられ、研究者それぞれの思想や信仰に応じた様々なイエス像が描かれてきた。今、研究者の数だけイエス像もあると言ってよいだろう(1)。

最近の文学社会学的研究もまた「イエス・キリスト」から「キリスト」を追放する。そして、もっぱら千数百年前に地上に生存して活躍したあのイエスとその弟子団とは誰であったかという問題にその関心を集中する。その研究の一例によると、イエスはシリア・パレスティナのユダヤ教内部に革新運動を引き起こした人物であり、ガリラヤ地方の村々を巡回した霊能者集団がそのイエス運動の担い手であったという(2)。

そして、今、イエスは、ある者には「治癒神」の衣装を着せられた「病気の治癒者」であり(3)、ある者には「歴史の先駆者」になった「逆説的反抗者」であり(4)、またある者には「脱呪術化」した「ことばの霊能者」であり(5)、その他である。「キリスト・イエス」から再び「キリスト」が消えて、キリストのいないキリスト教研究が盛んなのである。事実、これらの研究書の中には「キリスト」という用語すらほとんど現れていない。

近代のプロテスタント神学は、聖書を古代の(「唯一の」ではなく、数多くの中の)一つの書物とみなすことによって聖書にまとい付いていた神聖性を奪い去った。それは聖書から正典性(倫理的行為の規範性)が消失してしまったことを意味する。現在、正典的規範倫理はその成立根拠を失ったままである。イエスもまた倫理的行為の規範(意思の規定根拠)ですらなく治癒者、反逆者、霊能者、その他になった。このようなイエス像に我々の倫理的行為を誘発する力はもはや存在しない。イエスの生の諸結果ですら、すでに模倣の対象ではなくなっている。アッシシの聖フランシスはイエスの全生涯を完璧に模倣すべく、自らその四肢に「聖痕」に等しい傷痕を付けたという。あのフランシスのイエス像はどこへ行ってしまったのだろうか(6)。

聖書の正典的規範倫理は、かつての宗教的意味を失い、勤労・営利を事とする経済的禁欲倫理を生み出してからはすっかり死滅してしまい、今ではもう「亡霊」になった。プロテスタント神学の展開は「聖書主義」(sola biblia)という自らの存立根拠を裏切ったのである。聖書の「キリスト・イエス」は長い歴史の中で不断に人々の心を動かしてきた。しかし、聖書の学問研究が描き出すイエス像が人間を生まれ変わらせたことはない。多分これからもないだろう。

プロテスタント神学の今日的な展開は、かえって、自らのうちに存在した最も大切なもの、すなわち、使徒的宣教の中心的使信であった「イエス・キリスト」を見失ってきた。それは、この学問の歴史学的思惟がもたらした福音書の記述批判に頼りながら、宣教する者(史的イエス)が宣教される者(信仰のキリスト)にされたという前提に基づいて史的イエス像を描こうとしてきたことによる(7)。そこには「イエスからキリストへ」という思考の方向性がすべての研究に共通して全く無反省に前提されていたと言ってよいだろう。

しかし、人間のイエスがキリストとみなされたというこの臆断的前提を正当化できる何の証拠も存在していない。反対に、我々が所有しているのは、宣教されるべき者を宣教するために宣教者として描いている資料だけである。従って、「宣教する者」というのは、原始教団の人々が宣教するために描いた「宣教される者」についての一個の像(an image)であるに過ぎない。当時、ユダヤ教内部に待望されていたのは、終末時のメシアであって人間のイエスではなかった。待望のキリストが地上にイエスとして現れ救いのわざを成就してくれたというのが、原初の宣教の中心的使信だったのである。この両者の先後関係を見誤ると、我々の思考はあの「歴史の地獄」に落ち込むことになるだろう。

キリスト教的に言えば、探し求められるべき者は「福音書に描かれたイエス」ではなくて「福音書を描かせたキリスト」なのである(マコ1:37)。原初の宣教の原動力となったキリスト・イエス、西暦二千年間のキリスト教信仰を不断に生起せしめてきたキリスト・イエス(8)、——ただこのキリスト・イエスだけがキリスト教倫理の成立根拠でなければならない。「キリスト」と「イエス」とを二分して取り扱う思惟は、キリスト教倫理を決して正しい方向に導くことはないだろう。

最初期のイエス像

とまれ、「キリスト・イエス」信仰告白の中から史的イエスを取り出してその人物像を再構成しようという試みは、ことごとく失敗した。それは、福音書を始めとする「キリスト・イエス」に関する資料がすべてそのような歴史学的な(あるいは文献学的な)取り扱いを求めて書かれた書物ではなかったことによる。信仰というフィルターをかけられているイエス像の資料から、そのフィルターを取り

除けば、そこには真実のイエス像が現出するはずであるという単純な思い込みから、キリスト・イエスは、裸に剥かれて、次第に痩せ細り、最後には骨と皮ばかりになって、遂に幽霊の如く消えてしまったのである。

それ故、次には、イエスの「人物像」ではなくて、その「人となり」(Personlichkeit)や、その社会的な「振る舞い」などを明らかにしようという研究が盛んになった。そして確かに、それらはそれなりに着実な成果を収めてきた。しかし、そこに描かれるイエスの「人となり」や「振る舞い」もまた、新しくキリストへの信仰を誘発するような力を感じさせてはくれない。そして、何よりも、古い生を棄てて新しい生に生きようとする決断を促すような倫理的意志の規定根拠にはなり得ていないようである(9)。

史的イエスを再構成しようという今日までのすべての研究が無視してきた(あるいは、忘れてきた)一つの試みがある。イエスの身体的特徴からイエス像を再構成しようという試みである。イエスは背が高かったのだろうか、低かったのだろうか。太っていたのだろうか、痩せていたのだろうか。あるいは、どのような顔をしていたのだろうか、どのような手を持っていたのだろうか。・・・そうしたイエスの身体的特徴についてはほとんど何も考慮されてこなかったと言ってよい。

生前のイエスを知り、イエスの理由も何も語らないただ一言の呼び掛けに対し、一切の持てるものを投げ棄ててイエスに従った人々(マタ4:18-22, etc.)、このような使徒達にとってイエスの身体的な特徴の与える第一印象もイエスに従う決断を彼等に促す大きな要素の一つになっていたはずである。また、その後のローマ帝国世界を吹き荒れた迫害と殉教の嵐の中で、イエスと「楽しく」対話しながら迫害に耐えていた殉教者や聖証者達、このような人々の目にもイエスの具体的な人物像が見えていたはずである(10)。事実、キリスト教が公認宗教となつてからは、多くの身体的な特徴を共通に兼ね備えた様々なイエス像が創造されている。更に、後の東方正教会では周知のように、そのイエス像がイコン(聖画像)として崇敬(proskinêsis)の対象にすらなっている。従って、どのようなイエス像が具体的に描かれてきたのか、また、それらはどのような理由によるものなのか、そのように問うことは、キリスト教倫理の研究にとって、決して無意味なことではなく、むしろ、極めて重要なことではないだろうか。どのような信仰を持った人間がどのような行動を示し、それによってどのような文化を形成してきたか、それは、宗教倫理学の最も基本的な問いの一つであるはずだからである。そして更に、このように問うことは、「イエス・キリスト」から「キリスト」を分離して人間イエスばかりを史的に問い続けてきた従来の研究に対して一つの反省をうながすと同時に、もう一度、統一的な「イエス・キリスト」信仰の本来の真実は何であったかを原初に遡って考え直す好機ともなるはずだからである。とまれ、イエスはどのような身体的特徴を持っていたのだろうか。人々はイエスのそれをどのように考えてきたのだろうか。

(A) 新約文書中にイエスの身体的特徴を記述する章句はない。イエスがエリコの町を歩いていた時、徴税人頭のザアカイという金持ちがイエスはどんな人か見ようとしたが、背が低かったので、群衆に遮られて見ることが出来なかったという。そこで、ザアカイは先回りして、いちじく桑の木に上り、そこを通り過ぎようとしていたイエスを見ようと試みた。こうしてイエスに認められ、やがて救いを受けることになる(ルカ19:1-10)。

この挿話から「イエスは背が低かった」と推測されたこともあったという。しかし、これだけの報告から、そう断定するのは明らかに無理であろう。事実、この場合「背が低かった」のはイエスではなくてザアカイである。群衆に取り囲まれて見えないからといって、それだけの理由でイエスを「背の低い人物」と想定することはできないだろう。

また、この挿話が後代にイエスの画像やイコンを描く場合の根拠にされたという証拠は何もない。イエスの身体的特徴を伝える挿話としては理解されてこなかったのであろう。

従って、この章句をイエスの画像やアイコンと結び付けて考えることはできない。

(B) 新約文書中の章句からイエスに関する何か描かれたとすれば、それは多分、「ブドウの木」と「羊飼い」の二つであった。

①. 「ブドウの木」は、「ヨハネ福音書」第15章1～2節に見られる「わたしはまことのぶどうの木、わたしの父は農夫である。わたしにつながっていないが、実を結ばない枝はみな、父が取り除かれる。」に従っている。しかし、これは、あくまでも「ブドウの木」であって、イエスの人物像ではない。それを通して全く別の何か想定できるような象徴的な記号であるに過ぎない。人物像や肖像画とは程遠いものである。

なお、この章句に基づいて「父」(神)が「農夫」の姿で描かれたということもない。

②. 「羊飼い」も、「ヨハネ福音書」第10章11節に見られる「わたしは良い羊飼いである。良い羊飼いは羊のために命を棄てる。」に従っている。この場合の画像は明らかに人物像である。三、四世紀に、ローマのカタコンベの壁画などに描かれているという。しかし、描かれる人物を特定できるための諸特徴(肖像性)にはほとんど注意が払われていない。「現実の人間、肉体をもった人間には関心がなく、人物像は記号としてしか描かれていない」のである(11)。

ただ、この両者の場合、共にそれらの画像に基づいているのは、キリスト・イエスが語ったとされてきた言葉(章句)である点に注意したい。画像の製作者が「ブドウの木」や「羊飼い」などの素材を自らの恣意に任せて選び出したのではない。素材は、あくまでも神の子「キリスト」によって既に指定されていたものであった。「ブドウの木」も「羊飼い」も、いわば、キリストの、ひいては、神の、自己限定だったのである。「見えざるもの」が「見えるもの」に自らを限定して、その姿を現してくれた、それが「ブドウの木」であり、「羊飼い」の姿であるというのが、おそらく、それらの画像を描いてきた原初の人々の理解であったろう。そして、このような画像理解は、画像がやがてアイコンへと発達していった後にも、その底流において、決して変わることなく存続することになる。

なお、新約文書中の個々の章句との具体的な対応には配慮することなく、新約の信仰を伝えようとした記号的あるいは象徴的な画像もかなり多く存在する。次にそれらのうちからいくつかを拾い上げてみよう。

(A) 天使の支えるXP(キー・ロー)。これはXP I Σ T O Σ(キリストのギリシア語)の最初の二文字だけを取って、キリストを表現し、円の中にこの二つの文字を組み合わせて記号化したものである。この円は両脇から天使によって支えられている。400年頃の「サルギュゼルの石棺」の上などに見られるという。

(B) I X Θ Y Σ(ギリシア語で「魚」を意味するところから魚の画像)。これは、I H Σ O T Σ X P I Σ T O Σ Θ E O Y Y I O Σ Σ Ω T H P(イエス・キリスト、神の子、救い主)の頭文字を取って、繋ぎ合わせたmonogramがギリシア語で「魚」を意味するところから、魚の画像として描かれたものである。この「魚」は迫害期に多く描かれている。「隠し絵」などのようになったものもある。

天使に支えられるXPというのは、多分、神の国からキリストが(そして、その背後に存在する同質の神が)この世に下って来ることを意味する。XPの円形は、「見えざるもの」が「見えるもの」へとその姿を現す一つの相(カタチ)なのである。まさにそれ故にこそ、天使によって支えられていなければならない。従って、この記号は人間が恣意的に思い描いた像ではない。それは、人間の手を経ずしておのずから(神・キリストの人間への愛の故に)地上に出現した救いの像であった。

「魚」の形もまた、多分、そうであった。迫害時代のキリスト教徒にとって、ここそこに何か特定できる魚が問題であったわけではない。記号化した魚一般の形を通してその背後からこれと向かい合った者に与えられる神の子の救いこそが問題だったのである。従って、この「魚」もまた、人間がモノ

グラムに従って、単純に描き出した形ではなくて、すなわち、人間の手によって地上に出現した画像ではなくて、「見えざる」神もしくはキリストが、その人間への愛の故に、救いを成就しようとする世に現した「見える」一つの相（カタチ）だったのである。

すなわち、XP 円も魚も共にキリストもしくは神の自己限定の相（カタチ）だったのである。

しかし、なぜ XP 円や魚でなければならなかったのだろうか。今や迫害の時代である。単純に言葉によって「イエス・キリスト」を告白するなどということが許されるはずはなかった。無論、それでも告白する。そして、その告白にはそれ相応の危険を覚悟しなければならない。従って、先ず、①同じ信徒仲間には、それが何を意味するかが理解し合えて、しかも、異教徒には全く理解できないような何か特別な意志の伝達手段が求められていたことだろう。次に、②異教世界に宣教する場合でも、ただ相互にだけ理解し合えるような記号や象徴などを使用することによって、かえって仲間意識や連帯意識を強くし、一層効果的に布教活動を行なうことができることに気付いていたのではないだろうか。

(C) この間の事情を端的に物語っているのは、三、四世紀頃に知恵のあるローマの哲学者の姿を借りたキリスト像が造られているという事実である。ローマ人が理想像として描いてきたアポロやユピテルなど、ローマの神々の姿までもが借用されていたという(12)。

無論、これらのキリスト像が後代のイコンにおいて表現されるような身体的な諸特徴を備えていたなどとは考えられない。従って、それらは、当然、別の意味を持っていた。

このような手法は、おそらく、①迫害者の追求の目を晦まし、②異教徒に仲間意識を高めさせ、③あわよくば異教の神々に自分達の真の神を取って代らせようという効果を狙ったものと思われる。最初期のキリスト教徒はあくまでも平和裡に世界をキリスト教化しようと望んでいたのである。決して武力や暴力によって世界を征服しようとは考えていなかった。事実、キリスト教が四世紀にローマ世界の宗教になれたことも自らの力によって獲得した結果ではなかった。それは別の権力からやってきた。キリスト教は自らの力によって自らの地位を獲得したわけではない。そこにコンスタンティヌス大帝の歴史的意義がある。もっとも、公認宗教になってからのキリスト教についてはまた別の問題として考えなければならないだろうが・・・

キリストの「聖顔」

「聖顔」と呼ばれるキリストのイコンがある。12世紀にロシアのノヴゴロドで描かれたテンペラ画で、現在、トレチャコフ美術館に所蔵されている画像(77×71cm大のもの)が最もよく知られている。大きな光輪の中に広い十字架が描かれ、その円の中央に真っ正面を向いた顔だけが収まっている。一般に、人物などの顔を大写しに描く場合には、4分の3正面に描くのが普通である(そうでないと極めて描きにくい)。しかし、この画像は文字通り真っ正面を向いている。

仏教の禅宗絵画などに達磨や虎を描いたものがあり、どちらから見てもこちらを睨んでいるように見えるので、「八方睨み」と呼ばれている図柄のものがある。「聖顔」をこのような「八方睨み」と同じ意図に基づいて制作された画像であると考えられる人もいる。しかし、どのように眺めても、「八方睨み」には見えない。

とまれ、「聖顔」は、抽象的、一般的な人物像ではない。それが現実の人間への関心から描かれた特定の肖像画であることは明白である。実際に、そう断定してよい数々の身体的特徴を持っている。すなわち、――

①頭髪が中央で左右にきちんと分けられ、しかも、両肩にまで掛かる長髪であること。

②髪に分かれるところから数本の短い後れ毛が垂れ、右(または左)になびいていること(シナイ山のイコンにこれはない)。

- ③左の眉及び目がいくぶんつり上がっていて、必ずしも左右が対称的ではないこと。
- ④鼻筋が上下に真っすぐ通っていて長く、見ようによっては逆立ちしている「魚」でもあるかのように見えること。
- ⑤両耳が長い髪の毛に覆われていて、ほとんど見えず、その形を推測できないこと。
- ⑥口は唇がきちんと閉じられていて、丸く円を描くように結ばれていること。
- ⑦口髭は大きく八の字を描き、濃い頬髭から続く顎髭が長く喉元まで覆っていること。

このような多くの細かい身体的特徴を持っている。それらは、実際のところ、「意図的に」書き伝えられてきたものとしか考えられないだろう。事実、①最近、シナイ山のエカテリニ修道院で発見されて、6世紀のものとして推定された、現存する最古のキリスト・イコンの顔も、更に、②ギリシアのデルフォイ近郊にあるホシオス・ルカスの教会堂にモザイクで描かれた11世紀のキリスト像の顔などもまた、すべてこの「聖顔」に酷似した特徴を持っている(13)。

そして、「聖顔」後に描かれた多くのキリスト像の顔もまた、多かれ少なかれ、これと同じ特徴を持ち、その域を脱していない。

従って、おそらく、「聖顔」は、それまでのキリスト像が持つキリストの顔の諸特徴を集約したものであり、同時に、これより後のキリスト・イコンの顔のモデルともなったものであると考えてよいだろう。

キリストは、この「聖顔」のような顔を持ったイエスとして、この地上にその姿を現したのだろうか。「聖顔」がこのように固定化されるまでには、東方正教会などが「聖伝」と呼ぶ「伝承」の長い歴史がある。イエスの時代にまで遡るものさえ存在する。様々な伝承が存在するが、それらのほとんどすべてがキリストの顔はキリスト自身によって写し出されたとするものである。すなわち、その一つ一つが人間の手によって造られたものではなく、神の働きによって自然に写し出されたものだというのである。

無論、このような伝承は伝えられてきた時代や場所によって様々に変化した。そして、膨大な variations を残している。従って、ここでは、ごく平均的な伝承を取り挙げてみる外はない。また、当面はそれのみで足りる。その限定を負いつつ、次にいくつかの著名な伝承を取り挙げてみよう(14)。

I, イコン伝承も使徒の起源を持つ。使徒のルカが幼子のキリストを抱いて座った処女マリアをモデルにして、最初のイコンを描いたというのである。また、この伝承に関連してか、使徒のうちでも画の達人であったルカが、神人として現れたキリストの真の原像を画に描いたという伝承もある。

無論、これらの作品は何一つ残されていない。多分、ずっと後代になって、イコンに神聖性を付与して権威付けを行なう必要が生じた時に、使徒時代にまで遡って創られた伝承であったろう。キリスト教的に言えば、すべて、その神聖性の存在に関して何よりの証拠となるのは、常にそれが使徒の起源を持つということであった(15)。

II, 14-5世紀頃、フランスを中心に「ヴェロニカ伝説」が表面化し、流布している。キリストが十字架を背負ってゴルゴタの丘へ引かれて行った時、Veronika という名の一人の女性が麻布のタオルでキリストの顔の汗を拭いたところ、その麻布の上にキリストの顔の像が写って残ったという。以来、聖ヴェロニカはその聖顔が刻印されている麻布を広げ持って人々に示している姿で描かれてきた。そして、この「ヴェロニカ聖顔布」は、キリストの似顔絵の一つの源泉として、キリスト教美術に重要な位置を占めている。

もっとも、Veronika という語は、Vera (真の) + ikona (画像) を意味する合成語でもあり得るので、この伝承自体が意図的に創り出された伝説であるに過ぎないとも考えられないわけではない。

そしてまた、この伝承も様々な別版を持っているが、そのどれを取ってみても、キリストの聖顔の原型は「人間の手によって造られたものではない」と考える点において共通しているのである。

Ⅲ、イエスの死体を包んだとされる「聖骸布」(Shroud) にまつわる伝承も数が多い。イエスは刑死した後、亜麻布で(ちょうど「かしわ餅」のように)上下に包まれて埋葬されたが、この亜麻布にイエスの全身像、とりわけ、その顔がはっきりと刻印され、それが聖遺物として後代に伝えられたという。

この聖骸布が一躍有名になったのは、最近イタリアのトリノで一般に公開され、科学的な調査を受けた聖遺物の亜麻布が、このキリストの聖骸布ではなかったかと主張する人々が現れて以来のことである。無論、確固とした証拠があって聖骸布であると主張されたわけではなく、また、その反証についても同様であって、結局、謎に包まれたままなのであるが、これに写っている人間の顔が「聖顔」に酷似しているということは一般に言われてきたことである。本当に似ているかどうかは(かなり主観的な事柄でもあって)不明ではあるが、原初のキリスト像は決して「人間の手によって造られたものではない」という信仰にも似た確信の目が、両者を酷似しているように見せかけてきたのかもしれない。

Ⅳ、このような伝承の中で最もよく知られているのは、Mandyllion (キリストが顔を押し付けて、自分の顔をそのまま刻印したという麻布) のそれである。伝承は次のようになっている。

Edessa の Abgar 王は、ライ病患者であったが、彼の記録管理者のハンナン (アナニヤ) を、キリストにエデッサに来て彼の病気を治してくれるように要求する手紙を持たせてキリストのもとへ送った。ハンナンは画家であったので、キリストが来るのを拒んだ場合には、その肖像画を描いて持って帰るようにとも王はハンナンに命じていた。ハンナンが見出だしたキリストは大勢の群衆に取り囲まれていたので、彼は岩の上に登り、そこからキリストをもっとよく見て、肖像画を描こうと試みたが、しかし、成功しなかった。「恩寵を通して変化していたキリストの顔は、記述し難い栄光に包まれていたからである。」ハンナンが肖像画を作ろうと望んでいるのを見て取ったキリストは、水を求め、顔を洗い、一片の麻布でその顔を拭いた。すると、その上に彼の容貌が固定されて止められた。キリストはこの麻布をハンナンに与えて、王のもとへ手紙と一緒に持って行くように告げた。その手紙の中でキリストは、自分はエデッサへ行けないが、伝道が終了した時には、弟子の一人を王のもとに遣わすことを約束している。この肖像画を受け取ったアブガル王は、いくつかの病痕がその顔の上に残ったけれども、病気の最も厳しい症状からは癒されることができた。キリストの約束に従って、ペンテコステの後、タッデウス (タダイ) という使徒がエデッサにやって来てこの王を全快させ、王を改宗させた。王はこの町の門の一つの上から偶像を取り除かせて、その場所にこの神聖な画像を置かせたという。

この麻布 (Mandyllion) に写ったキリストの顔が一般に *acheiropoiētos* (人間の手によって造られたのではない) と呼ばれている「聖顔」である。この語の意味、すなわち、 α (否定) + $\chi ε ί ρ$ (手) + $\pi ο ι ε ω$ (作る) = not made with hands から見れば、「ヴェロニカの聖顔布」も「トリノの聖骸布」も、すべて「アケイロポイエートス」画像であることに変わりはないのだが、なぜかこのマンディリオンだけがこのように呼ばれている。(上に見てきたロシア・イコンの「聖顔」をこのように呼ぶ場合もある。) 伝承の成立史から見て、このマンディリオン伝承が最も早かったということなのだろうか。そして、この画像が後のロシア・イコンの「聖顔」へと発展したということなのだろうか。具体的な歴史の展開については、どの伝承の場合にも、ほとんど不明であるが、「アブガル王に送られたイコンに言及している最も古い、そして疑問の余地のない著者とされているのは」、6世紀のエヴァグリウスであり、彼はその『教会史』の中で、この肖像画を $\theta ε ο τ ε υ κ τ ὁ ς ε ἰ κ ῶ ν$ (神によって作られたイコン) と呼んでいるという (Historia ecclesiastica IV, 27, PG 96 : 2745-2748) (16)。

「アケイロポイエートス」の意味

「アケイロポイエートス」はどのような意味で使用されてきたのだろうか。まず、この語が新約文書から引かれているのは明らかなことである。おそらく、新約文書との対応から使用されてきたものであろう。既に新約文書中に、同様の意味を持って、三回ほど現れている。先ずそれらを確認しておこう。

(1). マルコ 14:58

この男が「わたしは人間の手で造ったこの神殿を打ち倒し、三日あれば、手で造らない (acheiropoiêton) 別の神殿を建ててみせる」と言うのを、わたしたちは聞きました。(最高法院でイエスに不利な偽証を行なった者の証言)

(2). コリント 5:1

わたしたちの地上の住みかである幕屋が滅びても、神によって建物が備えられていることを、わたしたちは知っています。人の手で造られたのではない (acheiropoiêton) 天にある永遠の住みかです。

(3). コロサイ 2:11

あなたがたはキリストにおいて、手によらない (acheiropoiêtoi) 割礼、つまり肉の体を脱ぎ捨てるキリストの割礼を受けたのです。

このように、新約文書中には僅かに三ヶ所しか見当たらないが、しかし、これらの証言を上に見てきたその後のキリスト像などに関する用法と照らし合わせてみると、この「アケイロポイエートス」の語が意味する内容は、次のように明らかである。

第一に、物質的な世界の背後に精神的な世界の実在が暗黙裡に前提されていること、

第二に、精神的なものは物質的なものに自己を限定してその姿(像)を現すこと、

第三に、肉体(物質)を持つ人間の側からみると、この像はその背後に存在する精神的なものに出会うことができるための窓になっていること、これである。

それ故、人間はキリストの画像を通して、一層よく、キリストと出会い、キリストから招かれ、キリストを愛し、キリストから包まれ、キリストに祈り、キリストから救われることができる。すなわち、このような意味での画像は、「絶対者に向かって開かれた窓」(それを通して精神的なものに出会うことのできる窓)なのである。

そして、「アケイロポイエートス」のキリスト像に見られるこの意味内容は、そのまま、やがて東方の正教会がイコンのうちに見出だすことになるイコンの存在理由そのものでもある。イコンは、東方正教会において、既にその画像成立の当初から「アケイロポイエートス」という存在意義を守り続けてきた。そして、まさにそれが、東方正教会が伝統を重視する保守的な宗派であると言われる理由の一つにもなっている。事実、東方正教会は、787年に開催された第七回世界会議(全地公会議)までの教会会議の決定は、これを教義としてきちんと守りながら、これ以降に開かれた世界会議の決定は、これを認めないまま今日に至っている。周知のように、この第七回世界会議(第二回ニカエア総会議)は、初めて制限付きながら、イコン崇敬を公式に認可し、教義化した会議でもあった(17)。

とまれ、「アケイロポイエートス」のキリスト像はそれまで断絶していた精神と物質との間の越え難い深淵の上に、両者の交わりを可能にする橋梁を架けていったのである。

旧約時代は、神も神の世界も見ることにはできない、神の国と人間の世との間には越え得ない断絶があると考えられていた(出エジプト 33:20, 3:6)。この断絶の観念は原初のキリスト教思想にも受け継がれ、やがて物質世界の肉体蔑視にまで発展する。例えば、修道制の父であったエジプト人のアントニオス(ca. 251-356)は、食事を取るなど、何らかの肉体的機能を満足させなければならない度に、いちいち赤面していたという。また、修道院の原点とされるエジプトのテラペウタイ集団の人々は、肉体的要求は夜陰に値すると考え、誰一人、日没前に食事をしたり、飲み物をとったりしなかったと

いう。ある者は知識を愛する余り、三日間も食事を断ったとも伝えられている（18）。肉体は精神によって否定されるべき「土と血の塊」であるとみなされ、精神から完全に切り離されていたのである。

しかし、今や、キリストの画像が、アケイロポイエートスなものであるが故に、まさにその故に、この肉体を、そして、物質の世界を肯定していく。それは、既に受け入れられていた受肉（託身）の秘儀を補完し、更に一層深めていくものであった。イエスという人間がキリストになったのではない。見えざるキリストが見えるイエスという姿をとってこの地上に出現して、救いの業を成就してくれたのである。この受肉の信仰を貫く論理はまた、アケイロポイエートスのキリスト像が受け継いで展開していった論理でもあった。

そもその初め、人間は、神にかたどられ (image)、神に似せて (likeness)、創造された（創世記 1: 26, 27）。人間はだから、本来、神の似像である。しかし、人間は自らの罪によってその似像を喪失した。そして、神と断絶した。いま、人間はこの神の似像を取り戻さなければならない。キリスト教的に言えば、信徒の日々の祈りと信仰の生活は、少しずつ、この似像を取り戻していく過程である。そして、アケイロポイエートスのキリスト像を通して、その向こうに、日々の祈りのうちに、出会う真実のキリストの姿こそ、人間が回復すべき本来の神の似像なのである。「人間の手によって造られたのではない」と信じながら、キリスト教徒達は、おそらく、そのような祈りと信仰の日常生活の中で、キリストの画像を描き、キリストの画像と向かい合ってきたのではなかろうか。無論、それは、後代になると多く枝分かれしていくような信仰の源流の一つなのではあるが。

結語に代えて

ナザレのイエスは本当にイコンの「聖顔」に見られるような特徴を持った容貌をしていたのだろうか。そもそも、史的イエスはどのような顔を持っていたのだろうか。最初期の人々は全く何も書き残していない。そして、それが描かれなかったのは、イエスがキリストと理解され、キリストが神と同質の存在として崇められていたために、旧約以来の偶像禁止に抵触することを避けたためであると一般には語られてきた。

しかし、描かれなかったのは、むしろ、描く必要がなかったからではないか、描かれないことによって、かえって、「キリスト・イエス」の精神性が高められていったのではないか、そして、そこに最初期のキリスト教徒の神・キリストに対する信仰の有り様の特質を見てとることができるのではないか、そう考えてよいだろう。また、そう考えなければならないだろう。事実、最初期の釈迦の場合もまた、太陽や菩提樹によって象徴的に描かれることはあったとしても、決してその具体的な肖像画が描かれることはなかった。そして、仏教に偶像禁止の律法はない。

もしそうであるならば、本来のその高い精神性を維持しながら、否むしろ、一層よく高めながら、なおかつ、キリストの肖像画を描くには、どのようにすればよいのだろうか。それが、キリストの画像を描こうと望む者やキリストの画像を必要とするようになった者達の最も中心的な課題であったことだろう。こうして、「アケイロポイエートス」のキリスト像が誕生することになる。

しかし、ヴェロニカの聖顔布やトリノの聖骸布なども含めた「アケイロポイエートス」のキリスト像に、最初から備わっていた身体的特徴を集約するようにしながら、イコンの「聖顔」はその肖像性を確立してきたのだろうか。（この見方が最も一般的ではあるのだが）。それとも、先ず成立した「聖顔」の持つ肖像性（身体的特徴）を歴史上に正当化するために、様々な「アケイロポイエートス」的な伝承が創造されてきたのだろうか。もし「聖顔」の肖像性が史的イエスにまで本当に遡れるならば、カトリック教会のキリスト像もまた、これと同様の身体的特徴を示すはずであろう。しかし、カトリック教会史のキリスト像にそのような特徴はほとんど現れていない。従って、現在のところ、両者の内的な関連性や伝承史的な先後関係は、ほとんど何も分かっていないと言ってよいだろう。

もっとも、そのようなことは分からなくてよい。また、分かる必要もない。仮に歴史的な考察によって、そのことが明らかになったとしても、それによって「アケイロポイエートス」の信仰が揺らぐことはないだろう。また、この信仰が働かなくなるということもあるまい。いま実際に問題なのは歴史的思惟による過去の事実の確認ではないからである。「人間の手によって造られたのではなく、神によって造られた」（すなわち、おのずから描き出された）ということが、歴史的な事実であったか否かという問いは意味のないものである。我々は、かつてそう信じた人々がいたという事実を確認すれば足りる。そして、その信仰がどのような行動を可能にしたか。また、その行動はどのような文化の形成を可能にしたか、そう問わなければならない。ここでは、歴史的理性に対して常に倫理的理性が優位しなければならないのである。信仰の内容（例えば、処女降誕や復活など）が歴史的な事実であったか否かとその正誤や真偽を歴史学的に判定するような努力は虚しいものであり、つまらないものであろう。我々にとって大切なことは、先ず、その信仰の真実の有り様を把握した上で、それがどのような意志規定の根拠として働いてきたか、また、どのような文化を形成する原動力となってきたかということ、歴史的な問いとしてではなく、どこまでも実践倫理的な問いとして、考えていくことでなければならない。「アケイロポイエートス」伝承を残してきた人々は、それがまさに「人間の手によって造られたのではなく」描かれたキリストの画像であることを少しも疑ってはいなかったし、また、その信念に基づいて行動し、その行動によって新しいキリスト教文化を生み出してきていたはずだからである。

信仰的な伝承文化の場合、倫理的思惟は常に歴史的思惟に優先する。事実、例えば、新約文書を書き残した最初期のキリスト教徒は、おそらく、誰もが、この自分ではなく、自分のうちに宿っている神の霊が書いていると信じていた。実際に書いているのは現実の人間であっても、本当に書いているのは神の霊であるというのである。記者自身にとってすら作者は神であって人間ではなかった（19）。

同様に、キリストの「聖顔」を模写している人々も、オリジナルは人間の手によって造られたものではなく、また、実際に描いているのも、この人間である自分ではなく、自分のうちに宿って働いている神の霊であると信じていたことだろう。そして更に、そのようにして出来上がった画像と向かい合った人々もまた、おそらく、自分が祈っているこの画像は、人間の手によって造られたものではないと信じて、この「窓」の向こうに存在するキリストと向かい合っていたに相違ない。

もしそうであるならば、そのことは我々に次のことを教えてくれるだろう。すなわち、ナザレ人のイエスがやがてキリストとされたのではなく、見えざるキリストが見えるイエスの姿を取ってこの世に現れた、——「アケイロポイエートス」のキリスト像を残してきた人々は、その信仰に生きていた人々であったということである。もし人間のイエスがキリストとされたのであるならば、イエスはどのようにして麻布に己れの顔を、何も使わずに、刻印することができたのだろうか。

従って、ナザレのイエスが、なぜキリストとされたのかというプロテスタンティズム的な問題提起は、それがキリスト教信仰の起源を歴史的に解明しようとする意図を持って行なわれる限り、明らかに間違っている。このような両者の先後関係という発想に立つならば、それは、「キリスト」と「イエス」とを二分して考察することになり、「キリスト・イエス」という統一的な一つの出来事の本質を捉えることは決してできないだろう。

キリスト・イエスの意義は、イエスの過去の諸行為を認識することにあるのではない。人類の未来の完成を待望することにある（ロマ5：1-5, 8：18-25）。史的イエスについて、どれほど歴史的認識を深めようとも、それによってイエスがキリストになるわけでは決してない。キリスト・イエスは現在に「復活」しているものとして、明らかに、歴史的研究の対象以上のものであり、以外のものである。聖書の中に我々を招き入れることによって世界の完成に生きる存在なのだからである。

無論、歴史学的に見れば、決してこのようなキリストのイエスが過去に実在していたわけではない

だろう。ただ初期のキリスト者のうちに、彼等がそこにおいて生きかつ死ぬことの原理として働き続けていたに過ぎない。しかし、そのことが彼等にはまさに決定的なことであった。そして、現代のキリスト・イエス理解にとっても、同様に決定的なことなのである。

「キリスト・イエス」はその画像を通して向かい合う者を抱き込みながら、一つの統一的な出来事として生起し、彼を「主と同じ姿 (eikôn) に造り変える」ように働き続けてきた (Ⅱコリ 3:18)。そして、いまも働いている。これからも働き続けることだろう。復活した「キリスト・イエス」として未来の世界 (神の国) を今に実現すべく、いまもこれからも働き続けていく。我々は、その「働き」の実際を「復活」と呼ぼう。「復活」という神秘的な信仰内容は、このように未来の完成に生きる倫理的な働きが現実にも存在していることとして理解したい。

「キリスト・イエス」は既に固定してしまっていて、歴史的理性に無限の分割を許すような過去の出来事ではない。絶えず未来に成就される神の国を目指して生起し続け、実践倫理的に未来を現在に呼ぶ出来事なのである。

たとえ、今日の歴史的思惟がどれほど厳格に否認しようとも、倫理的思惟から見れば、キリスト者の生と死との原理として働いてきた「イエス・キリスト」のほうこそ、現代の歴史的思惟が思い描く貧相な史的イエスよりも、はるかに「実在的」である。キリスト教徒の生死に働く原理というこの唯一のキリスト・イエスの出来事を正しく理解するためには、何よりも先ず、その新しい「倫理的実在論」に目を開かなければならないだろう。目を遮られていて、この復活のイエスを認めることができなかった二人の弟子も、やがてイエスのことばとわざとによって「目が開かれて、それが (復活の) イエスであることが分かった」のである (ルカ 24:31) (20)。

(H. 8. 1. 4.)

注

- (1) 拙稿「新約正典の倫理」(『秋田大学教育学部研究紀要, 第36集』所収, 1986.) P. 22 以下参照。
- (2) G. タイセン『イエス運動の社会学』, 荒井献・渡辺康鷹訳, ヨルダン社, 1981, P. 17 以下。ここには「キリスト」という用語がほとんど見当たらない。「メシア」の語も僅かである。
- (3) 山形孝夫『聖書の起源』, 講談社, 昭和51。
- (4) 田川建三『イエスという男』, 三一書房, 1980。
- (5) 久米明「ことばの霊能者イエス」(『現代思想』, 1984, vol. 12-7, 社会思想社)。
- (6) 下村寅太郎『アッシシの聖フランシス』, 南窓社, 昭和40, P. 47。
- (7) エーベルハルト・ユンケル『死』, 蓮見和男訳, 新教出版社, 1972, P. 174, 182。
- (8) 大島康正『実存倫理の歴史的境位』, 創文社, 昭和31, P. 802。
- (9) 拙稿, 前掲書, P. 21 以下参照。
- (10) 拙稿「殉教者宗教としてのキリスト教」(『秋田大学教育学部研究紀要, 第33集』所収, 昭和58) および拙稿「殉教者の「キリスト論」」(同紀要『第35集』所収, 1985.) 参照。
- (11) 鐸木道剛・定村忠士『イコン ビザンティン世界からロシア, 日本へ』, 毎日新聞社, 1993, P. 20-21。
- (12) 前掲書, P. 21-22。
- (13) 前掲書, P. 32-33。
- (14) ここからの記述は次の書物を参考にした (ここまでに既に言及した書物は除いてある。)
 - ①『新版 黄金伝説 抄』, ヤコブス・ア・ウォラギネ著, 藤代幸一訳, 新泉社, 1994。
 - ②『守護聖者 人になれなかった神々』, 植田重雄著, 中公新書, 1991。
 - ③『最後の奇蹟 トリノの聖骸布』, イアン・ウィルソン著, 木原武一訳, 文藝春秋, 1985。
 - ④『聖書とイエスの奇蹟』(別冊歴史読本), 新人物往来社, 1995。

- ⑤『東方正教会』, オリヴィエ・クレマン著, 冷牟田修二・白石治朗訳, 文庫クセジュ, 白水社, 1988。
- ⑥『東方正教会 諸聖略伝』, 一月~四月, 日本ハリストス正教会, 昭和63~平成2。
- ⑦『ゲスタ・ロマノールム』, 伊藤正義訳, 篠崎書林, 昭和63。
- ⑧『イコン』, クルト・ブラッシュ著, 三彩社。
- ⑨『イコンのあゆみ』, 高橋保行著, 春秋社, 1990。
- ⑩『イコン 聖画像新釈』, エフラム・ヨン+フィリップ・セール著, 西野嘉章訳, リプロポート, 1995。
- ⑪『魂にふれるイコン 絶対者に向けて開かれた窓』, ミシェル・クノー著, 高野禎子訳, せりか書房, 1995。
- ⑫『山下りん 黎明期の聖像画家』, 岡良三郎監修, 鹿島卯女編集, 鹿島出版会, 1976。
- ⑬『ロシア・イコンの世界』, ウラジミル・イワノフ著, 吉向キエ訳, 中央出版社, 1990。
- ⑭Ambrosios Giakalis : Images of the Divine, The Theology of Icons at the Seventh Ecumenical Council; E. J. Brill, New York, 1994.
- ⑮Engelina Smirnova : Moscow Icons, 14th-17th centuries ; Phaidon · Oxford, 1989.
- ⑯Kostadinka Paskaleva : Icons from Bulgaria ; Alpine Fine Art Collection (UK) Ltd. , 1991.
- ⑰Leonid Ouspensky : Theology of the Icon, Volume I , II ; ST. Vladimir's Seminary Press, 1992.
- ⑱Mahamoud Zibawi : The Icon Its Meaning and History ; The Liturgical Press, Collegetown, Minnesota, 1993.
- ⑲Russel M. Hart : The Icon Through Western Eyes ; Springfield Illinois, 1991.
- ⑳Philip Tamouth (Published) : An Iconographer's Patternbook The Stroganov Tradition ; Oakwood Publications, 1992.
- (15) 拙稿「使徒的ということ——キリスト教倫理の一前提——」(『秋田大学教育学部研究紀要, 第37集』所収, 昭和62) 参照。
- (16) Leonid Ouspensky : Op. cit. , PP. 50-52.
- (17) オリヴィエ・クレマン著, 前掲書, PP. 141-146。
- (18) 鐸木道剛・定村忠士著, 前掲書, PP. 19, 25-26。
- (19) 拙稿「使徒的ということ——キリスト教倫理の一前提——」, 前掲書, P. 2以下を参照。
- (20) 拙稿「殉教の「キリスト論」」, 前掲書, P. 11を参照。